2023年11月19日  川越教会

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　丸山　勉

神様の手に預けて

［マタイによる福音書19章13節～15節］

そのとき、イエスに手を置いて祈っていただくために、人々が子供たちを連れて来た。弟子たちはこの人々を叱った。 しかし、イエスは言われた。「子供たちを来させなさい。わたしのところに来るのを妨げてはならない。天の国はこのような者たちのものである。」 そして、子供たちに手を置いてから、そこを立ち去られた。

[1]　子どもと、その家族と、イエス様の出会いの物語

毎年この時期に教会では「子ども祝福式」を行っています。まあ、いわゆる七五三の行事を日本ではこの時期にしますけれども、それは、これまでの子どもの成長を感謝し、また祈りを捧げるということの意味が大きいのだろと思いますが、それを私たちは、私たちを創造された神様、また、子どもを抱き上げて祝福されたイエス様のもとで行っている訳です。

医学が発達していなかった昔は今と違って子どもが無事に生まれてくることや、幼い頃に病になり亡くなってしまうということも少なくなかったと聞きます。確かに考えてみれば、出産というのは、それ自体奇跡のようなことだと思います。私たちはどこか、女性の胎内で妊娠が起こって10ヶ月経てば赤ちゃんが生まれてくるのが普通のことのように思ってしまいますが、本当は大変なことですよね。一人の人の存在の中に、もう一人の命が宿るのですから。ですから、まずそのお母さんになる（なった）女性が守られることがないと新しい命の健やかな誕生というのは危険なことになってしまいます。そのようなことを思うと、特に一刻も早くパレスチナでの戦争、ロシアとウクライナの戦争が止むことを祈ります。病院という所は、命を支え、また産み出す手伝いをする場所の筈です。

今日の聖書の箇所は、イエス様のもとに、人々がイエス様に手を置いて祈って頂きたいと思い、子どもたちを連れて来たという記事です。短いけれども印象的な記事ですよね。読まれたマタイによる福音書では「子供たちを」となっていますが、同じ並行記事のルカによる福音書の方を見てみますと（ルカ18:15以下）、「イエスに触れて頂くために、人々は乳飲み子までも連れて来た」とあります。それこそ赤ちゃんです。もっと大きな子もいたでしょうけれども、赤ちゃんもそこにいた。そして、「人々は」とある、その「人々」というのは、その子の家族ですよね。私は今まで全くと言ってよい程、この物語は、“子どもたちとイエス様の出会い”の物語とだけ読んでいました。でも、これは“その家族の出会いの物語”でもあるなと、今回思わされました。

[2] 神様の手に預ける子育て

少し前にテレビで、タレントのベッキーさん（もう39才なんですね）が、赤ちゃんの子育てのことで、大きなメンタルクライシス（精神的に追い詰められること）を経験したということをお話されていました。ベッキーさんは今3才と2才の子のママなんですね。さっき、子どもを出産するということは奇跡的なことだと申しましたけれども、ベッキーさんもお子さんを産んで、良かった！これで終わったと思ったそうです。ところが、それからが大変だったと。ミルクが思うように与えられないということから始まって、疲れもたまって、毎日泣きっぱなしの日々だったと言います。友人たちからは「子育て楽しんでね」と言われるけれども、自分はちっとも楽しめなくて、時に子どもの存在が自分の存在を脅かす存在のように思えてくる、愛したくても愛せない瞬間がある。「子育てを楽しめない自分、はまるで悪魔じゃないか」と思えて、自分を責めてしまう時期がかなりあったそうです。自分はポジティブな性格だと思っていたけれども、暗い精神的危機を経験したというのですね。でもそのような中でお嬢さんがニコっと微笑んでくれるとやっぱり嬉しくて気持ちも癒されてくる。初めはパートナーにも遠慮をしていたそうです。パパは外で仕事があるからと。けれども二人目のお子さんが与えられ、やはり追い詰められてきた時に、パートナーに「結構つらい、結構限界」と打ち明けたそうです。それで彼がハッとし本気になって、「二人は大変だから子どもをそれぞれ分担制で見よう」と言ってくれるようになって大分助かったと言っていました。で、実は彼の方もやはり心配はしていたけれども、何をしてあげればいいか分からなくて悩んでいたということです。

その番組でも言っていましたが、子育てというのは、それぞれの家庭でずいぶんグラデーション（濃淡）があって、これで絶対大丈夫なんていう正解・メソッドはないし、あまり第三者に辛さを吐き出すなんていうことはしないので、それで危機に陥ってしまうということがあるのだと思います。一人の人が命を与えられ、成長していくということは当たり前ではありませんね。そこには、人知らず抱く、育てる者の様々な思い、喜びだけじゃなく、葛藤や涙もあるのですね。

今日の聖書の箇所で、自分の子どもを、また幼い赤ちゃんを、お母さん、或いはお父さんも居たかもしれませんが、イエス様に祈って頂くために連れて来たのです。自分たち夫婦の間だけでとどめずに、イエス様の御許に来たというようにも言えると思います。これはある意味子育てを、自分の中だけでしていくのではなくて、神様、イエス様の手に預ける、ということでもあるのではないでしょうか。私はそんなことを今回思いました。そしてイエス様は、自分のもとにやって来る者を拒んだりなさいません。弟子たちはイエス様の邪魔をしないようにと、その両親たちを叱ったとありますが、それは見当外れでした。イエス様が見ておられるのは、その幼な子の一人ひとり、また、その家族です。「子供たちを来させなさい。わたしのところに来るのを妨げてはならない。天の国はこのような者たちのものである。」 私は、「子供たち」という表現の中に、この世の価値観ではない、本来の人間の価値が表されているように思います。つまり、地位（権力）、名声、お金、そのようなもので測られない、神様が愛し、またご覧になっている「命」そのものの価値です。「天の国」とは、権力やお金では入れないのです。むしろ、私の持っている、自慢できる何かを持っていくのではなくて、神様が求めておられるのは、裸の私自身です、あなた自身です。天国の心は、「悔いし、砕けた魂」です。ベッキーさんが「もう限界、助けて」と訴えたように、私たちも、色々なものを抱えながら、神様に自分の心を全部ぶつけて行く、それを神様は待っておられるのだと思います。

[3] 私たちの命は、主が十字架にかかるほどに重たい

今日の「招きの聖句」で読んで頂いた聖書箇所に私はとても新鮮な思いを抱きました。ああ、こんなことをイエス様はおっしゃっていたのかと。マタイによる福音書の18章10節です。「これらの小さな者を一人でも軽んじないように気をつけなさい。言っておくが、彼らの天使たちは天でいつもわたしの天の父の御顔を仰いでいるのである」。「小さな者」とは、人間の評価の世界にあって、ということです。しかし、彼らは神様の前に全く軽んじられてはいない、それどころか、彼らには天に、天使（御使い）がついていて、そして天の父の御顔を仰いでいる、つまり、御使いによって、父なる神に執り成されているというのです。それほど人間の命は軽くない。重たいのです。ですから主イエス様は「子どもたちを来させなさい」と仰いました。

　「子ども祝福式」は、子どもの命の祝福の式です。そしてそれだけじゃない。その子どもと一生懸命、時に苦しみながらも共に生きていらっしゃる親御さん、或いは助け手の方の命の祝福の式です。主はマタイ福音書18章14節では、「小さき者がひとりでも滅びることは、あなたがたの天の父の御心ではない」と仰ってくださいました。そして、私たち一人ひとりのために、ご自分の命、神様の命と言ってよいその命を、私たちが罪赦され、御国の祝福と平安を受けることが出来るために、十字架でその命を投げ出して下さったのです。私たち一人ひとりの命、また子どもひとりの命は、この主イエスの命の中に保たれている、執り成されているのです。不思議なことですが、本当のことです。命の奇跡です。今日は、すべての命を喜ぶ日です。祝福式、おめでとうございます！

　お祈り致します。

神様、今日のこども祝福式礼拝を一緒に捧げることが出来てありがとうございます。こどもたちの命はもちろん、また私たちの命は、皆、あなたによって愛され、祝されている命であることを教えられ、感謝致します。私たちは欠けだらけの存在です。いつも誰かを悲しませ、傷つけてしまうような者だと思います。けれどもあなたは私たちを招き、御腕に抱きとめて下さいます。そのあなたの愛を頂いて、一緒に生きて行く家庭、また普段の生活を作って行くことが出来ますように恵みを注いで下さい。皆様おひとりひとりに主の恵みが豊かにありますように。主イエスの御名によって祈ります。アーメン。